

『源氏物語』は千年の間、さまざまな形で読み継がれ愛されてきた。歌人の必読の書とされ、数多くの注釈書が書かれ、『源氏物語』の続編やパロディも生まれた。その一方で、絵に描かれ、謡曲や歌舞伎などの演劇になり、源氏香という香道が生まれ、着物の模様にもなった。さらに江戸時代の人々は貝合せを初めとして、源氏かるたや源氏双六(すごろく)などを楽しんでいた。現代でも切手や二千年札に図案化されるなど身近なところに『源氏物語』は存在する。

これらの多種多様な意匠の中から、『国宝源氏物語絵巻』と『修紫田舎源氏』を紹介する。『国宝源氏物語絵巻』は紙本着色(展示絵巻はモノクロの複製)。作者未詳。平安時代末期の制作とされる。現在残っているものは、複数の制作グループによる競合の分担制作と推測される。『源氏物語』各帖から一ないし三場面程度を選んで絵画化し、詞書をつけた美しい絵巻。

本来は五四帖全体にわたったものと考えられるが、現在伝来しているのは、「柏木一」外の二〇段分と諸家に分蔵される詞書の断簡八葉である。また東京国立博物館所蔵の若紫図一葉も、後世の補筆が加えられているが、一連のものともみなされている。徳川本は尾張藩主徳川家に伝来した三巻分、五島本は阿波藩主蜂須賀家に伝来した一巻分であるが、現在は保存のため巻装を解かれ、絵は一紙ずつ、詞書は二紙ずつ額装になっている。

現存の二〇段の場面選択法は大別して、登場人物が詠み交わす和歌の趣を表わそうとする情趣性重視と、印象的な出来事を描き出す物語的興味の二傾向である。絵には、墨で下書きし、厚く顔料を塗り重ね、最後に輪郭線を描き起こす濃彩つくり絵の技法が用いられ、引目鉤鼻、吹抜屋台の手法で表現された画面は、繊細華麗であり、象徴的な心理描写が見られる。

興味を持たれた方は、ぜひ徳川美術館で本物を見ることをお勧めする。近年、復原された絵も一緒に展示される場合があるので、本来の絵巻がどのような色彩であったのかを鑑賞してみたい。絵を楽しむことで、『源氏物語』は数倍、面白くなる。

『修紫田舎源氏』の作者柳亭種彦は、湖月抄をもとにして『源氏物語』を足利時代に舞台を移して翻案化した(1829-1842)。挿絵は種彦が下書きをし、その指示に基づいて歌川国貞が独自の解釈で挿絵を描いた。その痛快な文章と歌舞伎風の彩色画の美しさによって、一万部もの大ベストセラーになるが、天保の改革により発禁処分となり、種彦は逮捕される。しかしその人気は衰えることはなく、種彦没後も別人による続編が次々と書かれた。

展示作品からは挿絵だけでなく、表紙や裏表紙に至るまで、工夫を凝らした様子が見てとれる。種彦と歌川国貞の『源氏物語』に対する熱い思いが感じられる。



図書館企画展示 **源氏物語** - 受け継がれる意匠

